

特集「内分泌疾患 update」

巻 頭 言

京都市立医科大学大学院医学研究科
内分泌・代謝内科学

中 村 直 登

内分泌学の定義は難しい。単細胞生物でない限り、生体は細胞相互に影響を感知し、影響しあうことによって存続している。そのシステムの一つとして、液性因子を介する方法があり、その一部を内分泌としているが、本来、境界は明瞭ではなく、その生体内の機能に則して名称が決められている。従って、今回の特集では、臨床的かつ古典的内分泌学の範囲での総説をお願いした。臨床的内分泌は大きく二つのカテゴリーに分類できる。糖尿病、甲状腺疾患は患者が多く、その他の疾患は比較的に患者が少ない。当然の結果として糖尿病、甲状腺疾患は広く理解され、臨床的にも社会的にも認知度が高い。それに引き換え、その他の内分泌疾患は医師にすら充分理解されず、社会的にも無視されがちである。

では、無視されがちな内分泌疾患を見逃さないようにするには、具体的にどうすればよいのだろうか？医師国家試験に合格すれば、煩わしい内分泌のことは忘れて一般的な疾患への対応をまず身に付けたいと望むのは、新人として当然の心理であろう。そこで、提案するのは内分泌疾患の再学習の機会を自分で作ることである。すべての医学知識は5年もすれば変わってしまう事が普通である。従って5年おきに最新の内科教科書を再度学習することをお勧めす

る。一度は学習したことなので、初回に比べればそれほどの苦痛はなく、意外と短時間で学習できる。

臨床的に大切なことは、自分の患者さんが内分泌疾患である可能性を常に頭においておくことである。内分泌疾患の初期症状は意外と地味であり、また、他の疾患の表現型をとることが多く、見逃す可能性が大きいのである。頻度の関係上、ある程度はやむを得ない点があるが、小さくても必ず内分泌的異常のサインを出している。この小さなサインを見逃さずに適正な、かつ簡単な検査をすれば、比較的簡単に診断できるものである。複雑な負荷試験までして確定診断せずとも、疑いで充分である。疑いがあれば地域の専門医に紹介すればよいのである。

今回の特集では、社会的必要度を考えて、頻度の比較的高いものを特集した。各分野での進歩は目覚ましいものがあり、理解するのが難しいものもあり、また、今後訂正される可能性も十分である。近年の医学的理解は乗数的に進歩しつつあり、5年に一度の学習では臨床的にすら不十分な分野もあるので、可能な限りネットへのアクセスを持ち、いやでも進歩が目に触れるようにするのが、一番簡単な方法であり、時には今回のような総説を一読することをお勧めする。